

ウーゴ・ロンディノーネ 「静寂のかたち」

2026 年 10 月 27 日～11 月 12 日

清水寺 成就院

9:30 – 17:00



展覧会文章

ウーゴ・ロンディノーネはそのキャリアを通じて、自然を単なる風景としてではなく、精神的・霊的な状態として捉えてきた。それは、身体や意識、そして広大な時空のなかにおける私たちの存在について思索するための場である。Sadie Coles HQ とアーティストによる新たなオフサイト・プロジェクトであり、ロンディノーネにとって初の日本での個展となる本展では、17 体の石の人物彫刻、太陽を描いた絵画 1 点、そしてトーテムのような僧侶の彫刻 1 体が、京都を代表する歴史ある仏教寺院のひとつ、清水寺に設置される。

その原初的なシルエットは、イヌイット文化に見られるイヌクシュク（石を積み上げて作られる人型や道しるべのような構造物）を想起させると同時に、父親が石工だったロンディノーネにとって、個人的にも深い意味を持っている。「月の庭」として知られる清水寺の成就院に設置されたこれらの彫刻は、現代美術の表現を、古くから続く精神的な風景と結びつける。モダニズム的な造形は、周囲の環境を遮るのではなく、そこから自然に立ち現れるかのように、異なる時代や伝統のあいだに静かな対話を生み出している。

寺院の建築と庭園に漂う瞑想的な雰囲気に呼応するように設置された彫刻群は、それぞれ大きさが異なり、原初的なシルエットによって、あたかも古くからそこに存在していたかのような佇まいを見せる。それらは時代を超えた神々であると同時に、道しるべや記念碑的な造形物でもある。大地に根差したその静かなる存在は、人間の身体と風景、永続と無常、そして地質学的な時間と人間の儚い一生とのあいだに対話を生み出している。こうした象徴的な意味合いは、ロンディノーネが継続的に制作している《Sun》シリーズや《Monk》シリーズにも見られる。そこでは、太陽のイメージや、瞑想する人物像が繰り返し用いられ、精神的な超越を促すモチーフとして機能している。

宗教的な営みと建築、自然の風景が、何世紀にもわたって重なり合ってきた清水寺において、本展は、ゆっくりと作品を見つめる時間を生み出し、私たちが自然界のなかでどのように生きているのか、そして私たちの身体もまた、ひとりの人間の生涯をはるかに超える力によって形づくられていることについて、思いを巡らせる機会となるだろう。



アーティストコメント

日本で初めての展覧会を、自然と建築、そして宗教的な営みが何世紀にもわたって共存してきた清水寺で開催できることを、心から幸運に思います。日本で初めて私の作品を紹介する場として、これほど意義深い場所は想像できません。

「静寂のかたち」では、僧侶、人間の姿、太陽という、根源的な三つの原型を結び合わせています。それぞれが、物質的な世界と私たちの内面、目に見えるものと、視覚を超えて感じ取るものとのあいだにある、異なる関係性を体現しています。

寺院の歴史あるある西門（さいもん）のふもとには、青と白に彩られた僧侶の彫刻が、祥雲青龍像と並んで立っています。寺の伝承によれば、青龍は慈悲の菩薩である観音の化身とされ、夜ごと音羽の滝に飛来して水を飲むといわれています。

その僧侶増は、記念碑的な存在感と、脆さをあわせ持っています。抽象的な白い身体に青い頭部をもつその姿は、衣をまとった孤独な人物を思わせます。鉱物を想起させるような粗い表面は、人の手によってではなく、自然の力によって形作られたかのような印象を与えます。僧侶像と祥雲青龍像は、異なる歴史と精神性が静かに出会う場を生み出しています。龍が運動、守護、変容を象徴する一方、僧侶は静止、観想、内省を体現しています。両者の対話は対立するものではなく、共存するものとして描かれ、精神性が動きと静止のどちらを通して現れうることを示唆しています。

寺院の境内の別の場所では、清水寺の塔頭であり、名勝「月の庭」で知られる歴史ある成就院の室内に、17体の人物像が佇んでいます。石や苔、水、そして借景として取り込まれた山の風景が緻密に構成された庭園は、自然界をじっくりと見つめ、思索を深める場となっています。この17体の人物像は、人間の身体と鉱物の世界との関係を探る、継続的な制作の一環です。成就院の室内に置かれた人物像は、ひとつの静かな共同体を形づくりします。その存在は、成長や浸食、変容を通じて絶えず関係し合う石や苔、植物からなる、外の庭園とも呼応しています。

床の間には、赤と黒からなる一枚の太陽の絵画が飾られています。同心円状に広がる色面は、暗い中心から放射状に広がりながら、光が拡張すると同時に引いていくような感覚を生み出します。この絵画は、静止のなかに動きを宿し、光と闇が永遠に繰り返す循環を通して、時間が絶えず流れていく様を示唆しています。この太陽の絵画は、身体と自然界をめぐる対話に、もうひとつの次元をもたらします。人物像が地質学的な時間のゆるやかな持続を体現する一方、太陽は日々や季節、そして人間の生の循環的な時間を想起させます。一方は物質に根差し、もう一方は純粋な輝きとして存在します。しかし、両者はいずれも本質的な静けさを宿しています。

僧侶、石の身体、太陽という三つの原型は、苔や木、水、光によって形づくられた風景のなかに共に存在しています。それらは寺院に自らの存在を押しつけるのではなく、その建築や精神的な歴史、そして周囲の自然界と関係を結ぼうとしています。

本展「静寂のかたち」は、存在とは何か、身体がいかに時間を宿すのか、そして静けさがどのように存在感を生み出すのかをめぐり思索です。本展は、外の風景と私たちの内なる世界との境界が次第に溶け合い、身体が風景となり、鉱物が精神となり、静寂がものを見るひとつの方法となるような、思索のための空間を提示します。

* * *

ウーゴ・ロンディノーネ

1964 年スイス、ブルンネン生まれ。オーストリアのウィーン応用美術大学を卒業後、1997 年にニューヨークに移住。現在も同地を拠点に活動を行う。

近年の主な展覧会・作品発表に、シュテーデル美術館（フランクフルト、2026 年）、FLAG アートファンデーション（ニューヨーク、2026 年）、アウスラントシュヴァイツァープラッツ（ブルンネン、2026 年）、ハーバード大学（ケンブリッジ、2026 年）、Sadie Coles HQ（ロンドン、2026 年）、ロイヤル・アカデミー・オブ・アーツ（ロンドン、2026 年）、ボン・ストリート（ロンドン、2026 年）、ジュネーヴ美術・歴史博物館（ジュネーヴ、2026 年）、フランス学士院（パリ、2025 年）、バイエラー財団（リーヘン、2025 年）、ミラノ市立近代美術館（ミラノ、2025 年）、アルテ・アビエルト（メキシコシティ、2025 年）、マドゥー保護区（ニューヨーク、2025 年）、ウォーターミル・センター（ニューヨーク、2025 年）、バイエルン州立歌劇場（ミュンヘン、2025 年）、ピラネ彫刻公園（チョーン島、2025 年）、ライフール・アート・センター（パリ、2024 年）、アスペン美術館（コロラド、2024 年）、ヴェルト美術館（キュンツェルザウ、2024 年）、ルツェルン美術館（ルツェルン、2024 年）、ミュージアム SAN（原州、2024 年）、フィリップス・コレクション（ワシントン、2023 年）、復星芸術センター（上海、2023 年）、Galerija Kula（スプリト、2023 年）、アムステルダム国立美術館（アムステルダム、2023 年）、パリッシュ美術館（ニューヨーク、2023 年）、シュテーデル美術館（フランクフルト、2023 年）、ストーム・キング・アートセンター（ニューヨーク、2023 年）、ジュネーヴ美術・歴史博物館（ジュネーヴ、2023 年）、スクオーラ・グランデ・サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ（ヴェネツィア、2022 年）、マニフェスタ 14（ブリシュティナ、2022 年）、カタール・ミュージアムズ（ドーハ、2022 年）、プティ・パレ（パリ、2022 年）、シルン美術館（フランクフルト、2022 年）、タマヨ現代美術館（メキシコシティ、2022 年）、スカulptチャー・ミルウォーキー（ミルウォーキー、2022 年）、PODO ミュージアム（済州島、2022 年）、オークランド美術館（オークランド、2021 年）、ベルヴェデーレ宮殿（ウィーン、2021 年）、ザ・ナショナル・エグゼンプラー（アイオワシティ、2021 年）、ルストワランデ（ティルブルフ、2021 年）、ベルヴェデーレ 21（ウィーン、2021 年）、コルトレイク・トリエンナーレ（コルトレイク、2021 年）、ソールランデ美術館（ノルウェー、2021 年）、クンストハレ・マルセル・デュシャン（キュリー、2021 年）、サンタンドレア・デ・スカフィス（ローマ、2020 年）、メデジン近代美術館（メデジン、2019 年）、パリ国立高等美術学校（パリ、2019 年）、ヘルシンキ美術館（ヘルシンキ、2019 年）、ギルド・ホール（ニューヨーク、2019 年）、Carré d'Art およびイエズス会礼拝堂（ニーム、2019 年）、コンテンポラリー・オースティン（テキサス、2018 年）、テート・リパブール（リパブール、2018 年）、マルシアーノ・アート財団（ロサンゼルス、2018 年）、マルタ国際現代美術スペース（マルタ、2018 年）、パレ・ド・トーキョー（パリ、2018 年）、カルミニャック財団（ボルネオ島、2018 年）、カサ・ワビ財団（オアハカ、2018 年）、ARKEN 現代美術館（イシヨイ、2017 年）などがある。

2017 年には、ニューヨークの主要な文化施設を横断する大規模な回顧展が開催された。会場となったのは、The Kitchen、White Columns、Artists Space、ニュー・ミュージアム、ハイライン、Sky Art、スイス・インスティテュート、Red Bull Arts New York、ハンター・カレッジ・アート・ギャラリーズなどである。同年には、イスタンブール・ビエンナーレ（イスタンブール、2017 年）、バス美術館（マイアミ、2017 年）、ヴェルサイユ宮殿（ヴェルサイユ、2017 年）、ガレージ現代美術館（モスクワ、2017 年）、アスペン美術館（コロラド、2017 年）、コンテンポラリー・アーツ・センター（シンシナテ

イ、2017 年）、パークレー美術館・太平洋フィルム・アーカイブ（カリフォルニア、2017 年）、MAXXI 国立 21 世紀美術館（ローマ、2017 年）でも作品を発表した。

そのほかの主な発表先として、バス美術館（マイアミ、2016 年）、カレ・ダール現代美術館（ニーム、2016 年）、MACRO 現代美術館（ローマ、2016 年）、トラヤヌスの市場（ローマ、2016 年）、ボイマンス・ヴァン・ベニンゲン美術館（ロッテルダム、2016 年）、Art Production Fund およびネバダ美術館（ラスベガス、2016 年）、ボストン現代美術研究所（ボストン、2016 年）、ヴァンドーム広場（パリ、2016 年）、パレ・ド・トーキョー（パリ、2015 年）、ニューサウスウェールズ州立美術館（シドニー、2015 年）、セセッション（ウィーン、2015 年）などが挙げられる。

清水寺、成就院について

今から約 1,250 年前に創建された清水寺は、京都・東山の音羽山中腹に位置し、慈悲深い観音菩薩を参拝する人々が数多く訪れる寺院です。その塔頭である成就院は、戦乱による焼失後の清水寺の再興に長年尽力した僧・願阿（がんな）の住坊として建立されました。また、毎年限られた期間に特別公開される、名勝「月の庭」でも知られています。